

研究タイトル：

横光利一作品研究

氏名： 八原瑠里 / YAHARA Ruri E-mail: yahara@gen.yuge.ac.jp

職名： 助教 学位： 修士(文学)

 所属学会・協会： 日本近代文学会 日本文学協会 昭和文学会
 立命館大学日本文学会 横光利一文学会

キーワード： 日本近代文学 横光利一 新感覚派文学

 技術相談
 提供可能技術：


研究内容： 横光利一作品研究

◆ 横光利一作品研究

本研究は、横光利一（1898～1949）の作品群を精読し、文学と社会に対する横光の問題意識を可視化させることで、現代の社会や文学に通底する課題を究明する視座の提示を目的としている。

横光は、当時の最新科学を積極的に受容し、新しい認識論に基づいた文芸理論を精力的に創出し続けた。1920年代には自然主義文学やプロレタリア文学の文芸理論と差異化を図りながら、「新感覚派文学」の旗手として活躍している。そのため、従来研究では同時代の創作活動や文芸理論に基づいて作品が区分され、そこで文芸理論がどのように実践されているか演繹的に分析されてきた。この方法は横光の文芸理論の内実を具体化するうえで効果的である一方、時期区分を前提にして分析するため文芸理論の萌芽を見落とす可能性もあった。また、研究対象が『上海』や『旅愁』など代表的なものに偏るといった傾向もある。

そこで本研究では、横光が独自の文芸理論を創出していた初期作品群に焦点を当て、作品を精読して分析を蓄積することで、横光の社会や文学に対する問題意識の生成と実践の過程を帰納的に解明していく。作品内の術語や同時代背景を綿密に調査・分析し、〈千変万化する現象を描く〉という横光の表現方法の内実を明らかにする。カント、マルクス、ソシュール、ベルグソン・シクロフスキーなど、横光が受容した思想を参照しつつ作品分析するため、大正・昭和初期における近代思想の受容という観点でも考察を加える。

横光は、戦前は「文学の神様」と称され、多くの読者を獲得したにもかかわらず、敗戦後は戦争責任によって評価が地に落ちてしまう。このような社会的な評価（コンテキスト）から作者・作品を解放し、横光がどのように「文学」と向き合い、自身の「文芸」を開拓し続けたかを具体的な作品に基づいて究明することで、「文字」によって人間の認識を表現することの限界と可能性を模索していく



提供可能な設備・機器：

名称・型番(メーカー)	